

序文

「レーザーは21世紀の光である」と言われて久しい。レーザーは日常のあらゆる分野に応用され、人々の生活を豊かにしている。歯科治療に応用されるようになって50年余りを数える。日本レーザー歯学会が産声をあげたのが1989年のことである。

今般、学会として初めて監修と編集を行い、レーザー治療の手引きとなる参考書を刊行した。特に安全面に配慮し、また、認定医、専門医を目指す若手歯科医師の指針となるように努めた。日本レーザー歯学会は2013年に法人化し、今後、厚生労働省の認める広告可能な専門医資格認定団体を目指している。レーザー治療の一部は保険診療に認められ、歯科治療へのレーザーの応用は市民権を得たと考えている。昨今では、歯科医師国家試験やCBTにレーザーに関する問題が出題されるようになった。歯科におけるレーザー治療が本格化するためには、29歯科大学でアンダーグラデュエイトにおいて教育され、実習が行われることが必要であり、今回の企画はそのための教科書を意識したものになっている。

レーザーは人工的に作られる電磁波で、その優れた性質により、医療の世界にも診断、治療、予防に役立つ従来の方法を凌駕するツールとして注目されている。歯科治療の本質は口腔細菌すなわち口腔バイオフィルムを如何に駆逐するかにある。口腔内には約550種類ほどの菌種の存在が知られているが、従来の薬物治療法では耐性菌や菌交代症の副作用が懸念されるが、レーザーにはそのような副作用は皆無である。安心安全の治療を提供することが可能である。

レーザー機器は高価であることが普及を妨げている。しかし、経済の原則で販売台数が増えればその価格も下がることが期待される。レーザー装置にはそれぞれ特徴があり、その特徴を生かして、国内の各レーザーメーカーの協力を得て、新しい治療法を開発し、検証し、広く国民に普及させることが学会の使命であると考え。PAMDA（独立行政法人医薬品医療機器総合機構）とも良好な関係を保ちながら未承認機器の優れたものを早期に導入することも学会の役割と考えている。

本参考書が完成したのは日本レーザー歯学会の各学術委員とりわけ委員長の横瀬敏志先生の並々ならぬ尽力のおかげである。この場をお借りして御礼を申し上げたい。また、本の企画から出版まで大変お世話になったデンタルダイヤモンド社の牧野英敏氏、中村彰一氏に深く感謝したい。

2015年 早春

一般社団法人日本レーザー歯学会理事長 渡辺 久